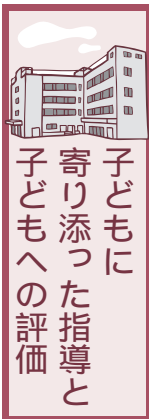
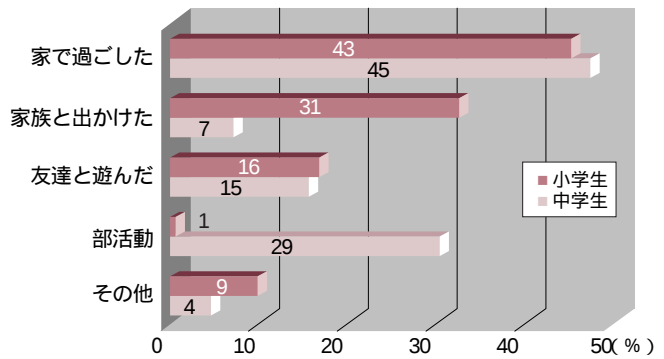


保護者は小学校32%、中学校36%が「よくない」という回答でした。その主な理由をみると、「今までと違うのでとまどいがあった」「5日間では気持ちの切り替えができない」などの声が多く挙げられていました。導入初年度ということもあり、秋休みが定着していくまでには時間が必要であること、また、秋休みそのものの考え方を、時間をかけて検討していく必要があることが考えられます。

次に、子どもへの設問「秋休みの5日間のうち、後半の2日間、主にどのような過ごし方でしたか」では、「家で過ごした」は、小学生では43%、中学生では45%と約半数、また、中学生では「部活動」が29%となっています。「友達と遊んだ」は、小中学生とも約15%でした。これらのことから、子どもたちが家でのんびり過ごしたり、友達と遊んだりして、秋休みの期間を楽しむことができたことがうかがえます。

新たに設定された秋休みについて、今後定着を図るなかで、子どもにとって有意義なものになるよう、保護者の理解と家庭での話し合いが必要であると考えられます。

秋休みの過ごし方(児童・生徒)



子どもに寄り添った指導と子どもへの評価

2学期制導入を契機に、それぞれの学校では、これまでの子どもへの評価のあり方を見直し、子どもの学習の様子や進歩をより確実にとらえ、きめ細かな支援ができるように努力をしてきました。教員に、この点について1回目のアンケートと同様の設問を行いました。

3学期制であれば2学期最後の月となる12月について、設問「12月の時期に、以前と比べてじっくり子どもに寄り添った指導をする時間に費やすことができたか」に対して、「かなりできた」(15%)、「おおむねできた」(55%)合わせて70%となっています。教員が子どもに寄り添いながら、きめ細かな支援を心がけていることがうかがえます。

設問「子供の学習状況を把握しながら、評価するように心がけてきましたか」に対しては、「かなりできた」(9%)、「おおむねできた」(58%)合わせて67%となっています。その主な理由をみると、

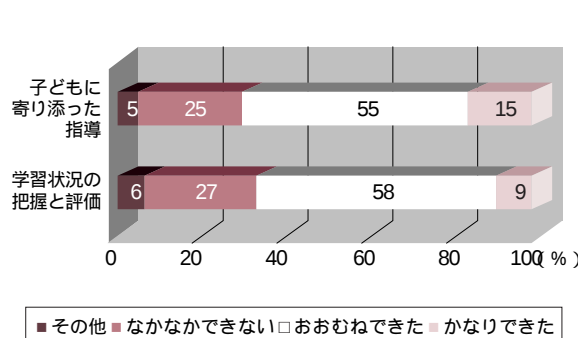
- ・単元ごとに観点別評価をして、各自の長所・短所を把握するように努め、それを生かして指導および支援が行えた。
- ・長期にわたった評価になるため、単元それぞれを記録する必要があり、一人ひとりに目を向けることが増えた。

などが挙げられます。1回目(7月)の調査時では、「かなりできた」「おおむねできた」合わせて58%であったことを

考えると、教員の意識化もより進んできていると考えられます。



子どもに寄り添った指導と評価



2学期制導入初年度ですが、後半になるにしたがって、子供一人ひとりを確実にとらえ、きめ細かな支援をしようとする教員の意識が、より高まってきていると考えられます。